



アメリカ童話から

22

松原至大

上つたり下つたりの兄妹

ジャックちゃんとジエネットちゃんは、ふた子の兄妹でした。町からはなれた農場に住んでいました。近くには、お友だちがいまません。毎日兄妹でばかり遊ぶので、時には飽きてしまうこともありました。

雪がたくさん降っている、土曜日の朝のことでした。お父さんは、家畜の見まわりにおでかけになりました。お母さんもお使いで、お留守でした。お家には、ジャックちゃんとジエネットちゃんと、それからコリー種の仔犬ラツグスとだけでした。(コリー種の犬つて、ご存じですか。イギリスのスコットランドに多い犬。家畜の番が上手です。鼻の先が細くながつて、毛が長く、ふさふさとした尾を持っています。)

「エレヴェータごつこしない？ 町のデパートになるでしょう。」と、ジエネットちゃんがいました。

「いいとも。ぼくが、先に運転するから、ジエネットちゃんは、その次ぎだよ。ホールのじゆうたんを、エレヴェータつてことにしようよ。」と、ジャックちゃんが賛成しました。

「わたしが、先よ。わたしが、思いついたんですもの。」と、ジエネットちゃんは反対しました。

「ぼくが、じゆうたんのことを思いついたんだよ。」と、ジャックちゃんは負けません。

ふたりとも、おこつてしまつたようです。そのうちに、ジャックちゃんが、急に笑い出しました。そして

「君は、ぼくの妹だよ。おまけに、たつたひとりの遊び友だち。いいよ、君が先にエレヴェータを運転おしよ。」

「まあ、うれしい。でも、わたし、わがままだつたわ。お兄ちゃん、先に運転して。」

と、ジエネットちゃんはいいました。

「いいよ。先におやりよ。」と、ジャックちゃんがひきません。

「いや。」と、ジエネットちゃんもひきません。今度は、ジエネットちゃんが笑い出して

「わたしたち、おぼかじやないかしら。今度は、あとになりたくて、けんかをしているのよ。いいわ、こうしましよ。上る時は、わたしが運転して、下る時は、お兄ちゃんが運転するのよ。」といいました。

「ぼく、上る方を運転したいな。君、下る方をおやりよ。」と、ジャックちゃんがいいました。

今度は、ふたりともおこつてしまつて、どちらも笑いませんでした。けれども、そのうちに、ジエネットちゃんが口を開きました。

「いいわ。お兄ちゃん、上る方をやつてちようだい。一番上まで、わたしとラッグスを連れてつてちようだい。」けれども、その朝のジャックちゃんは、どうかしていたのちがひありません。

「犬は、エレヴェータの中に、連れて行けないことになつてるよ。」と、むつとりとしいいました。

ジエネットちゃんは、泣き出しそうになりました。

「おいで、ラッグス。あつちへ行きましよう。もうお兄ちゃんと、遊ばないことにしまししようね。わたしたち町へ行つたことにして、お兄ちゃんにあの古ぼけエレヴェータを、ひとりで運転させようつと。」

ジエネットちゃんと言ッグスは、居間にはいつて、町へ行く遊びをはじめました。ジャツクちゃんは、ホールに残つて、じゆうたんのエレヴェータで、上つたり、下つたりしていました。ふたりとも、音はたてていませんが、どちらも面白いとは思いませんでした。

そのうちに、ジエネットちゃんがいきました。

「おいで、言ッグス。ここのお店にはいつて、お前の首輪を見つけてきましょう。」

ジエネットちゃんと言ッグスは、じゆうたんのエレヴェータの方へきました。ジャツクちゃんは、にっこりしました。ジエネットちゃんが、遊びにきてきてくれたのがうれしいのでした。

「さあ、どうぞおのり下さい。」と、ジャツクちゃんはいきました。

「犬の首輪は、なん階ですか。」と、ジエネットちゃんがたずねました。

「五階でございます。けど、ちよつとお待ち下さい。その犬は、エレヴェータにおのせることはなりません。」と、ジャツクちゃんがいうので、ジエネットちゃんは

「ほんとうですか。」とききました。

「もちろんでございます。ほかのお客さまが、めいわくをなさいます。」ジエネットちゃんは笑い出しました。

「ほかのお客さまですつて。このエレヴェータには、わたしひとりじやないの。さあ、言ッグス、おいで。五階へどうぞ。」

ジャツクちゃんは、エレヴェータが上る音を、口でまねました。リーヴァ（エレヴェータを上げたり、下げたりする機械の取手のことですよ）を、かたんとやつて、エレヴェータを五階に止めました。そしてドアを開くまねをすると、

「五階でございます。犬の首輪とネクタイの売場でございます。足もとにお気をつけ下さい。」といいました。

ジエネットちゃんは、につこりしました。ジャックちゃんが、りつばなエレヴェータ・マンをつとめたからであります。ジエネットちゃんは、エレヴェータからおりて、お店の食堂にはいりました。そこで、ラッグスのために、首輪を買つてやつたことになりました。お店から出てきたふたりを見ると、ラッグスは巻いた新聞紙を、首のまわりにつけて、得意になつていました。

ジエネットやんが、またエレヴェータにのりますと、

「りつばな犬になりましたね。」と、ジャックちゃんがいいました。

「ええ、とてもよい仔犬ですよ。名は、ラッグスといますの。」と、ジエネットちゃんはうれしそうでした。

「ぼく、こんな犬が好きなのでですよ。ぼくが、エレヴェータを運転したお駄賃に、この犬をゆずつてくれませんか。」と、ジャックちゃんがいいました。

ジエネットちゃんは、くすくす笑つて、うなずくと、ジャックちゃんとかわりました。

「さあ、おのり下さいませ。すいておりますから、どうぞ。下へ参ります。」

ジエネットちゃんはこういいました。

リーヴァを動かすまねをしました。そしてジャックちゃんといつしよに、楽しそうに笑いました。けんかをするよりもどんなにか面白いのでした。新聞紙の首輪をつけたラッグスも、うれしそうに笑つていました。

(Fletcher D. Slater フレッチャー・D・スレータ氏の作による)